

Title	S· N· クレーマー著,久我行子訳,『シュメールの世界に生きて：ある学者の自叙伝』
Sub Title	
Author	森, 雅子
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.2/3 (1990. 7) ,p.161(331)- 162(332)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0161">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0161</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

S・N・クレーマー著

久我行子訳

### 『シユメールの世界に生きて

——ある学者の自叙伝——

(一九八九年、岩波書店)

森 雅子

本書はシユメール学の三人組といわれるファルケンシュタイン——ヤコブセン——クレーマー・トライアドの一人、サミニエル・ノア・クレーマーの自叙伝である。と同時に、著者自身が日本語版への序文で述べているように、「これは、シユメール文学とシユメール文化の研究という、どちらかというとごく少数の人々の通るハイウェイや複雑で入り組んだ脇道を、一人の学者が生涯をかけて旅した記録」であり、むしろ彼の学問研究の年代記である。

例えば、読者は本書の第一章で一八九七年に著者が生まれたまでの「幼年時代」について、彼が語るのは、おおむね彼が受けた教育——学問の思い出であり、家族との交わりや故郷の山河ではない。そしてこの点では、二〇世紀初頭のロシアを席捲

した反ユダヤ主義の波に追われて、フィラデルフィアに移住した後も同様であり、彼はその地で通った公立小学校について、イエシヴァー（ユダヤ教神学校）について、更に上級の中・高等学校や師範学校について詳細な記述を試みる半面、母の死といった重大事件に関しては僅か一行（一二頁）言及しているに過ぎない。このような著者の「個人的な事柄に沈黙を守る」という終始一貫した態度は、序言においてミゲル・シビルがいみじくも評言している如く、「サム・クレーマーが人生において真に何を優先させているかを反映しているのである。」

本書の第二章以下は、一九三〇年にペンシルヴェニア大学大学院からオリエント学で博士号を授与され「新米学者」となった著者が、イラクの遺跡ファラ（古代都市シユルッパク）の発掘調査に参加し、ついでシカゴ大学オリエント研究所ではアッシリア語辞典編纂プロジェクトの一員として働きながら、次第に「シユメール学の専門家」として成長していくさまが描かれている。しかし、このシカゴ大学での生活は著者が第四章に「私の不運な経験について書いたものかどうか、はなはだ迷つた」と記すエピソード——一九三四には露骨な反ユダヤ主義のために「近東言語・文学部スタッフ」に任命されず、更に一九三六年には「即時解雇」の通告を受けるという事態——が起り、「絶望のうちに」終わっている。

一九三七年、「クレーマー一家」（著者と妻、四歳の息子ダニエル、一歳の娘ジュディー）は貨物船でイスタンブルへと旅立ち、その地で一六七枚のタブレットやその断片を筆写して帰国

するが、その後も著者のペンシルヴェニア大学博物館客員研究員としての不遇の時代が長く続く。実際、彼が同大学における

クラーク記念アッシリシア学研究教授に任命されたのは、すでに五〇歳を過ぎた一九四八年のことである。

しかし、一度この「大学の教師」というかなり安定的な地位を得た」後の彼の活躍には目を見張るものがあり、例えば巻末に附された著作目録の論文だけに限っても、一九四八年以降に執筆、発表されたものは優に一〇〇篇を越えている。従つて、本書の第五章以下には「神々——シュメールの神話」「英雄たち——シュメールの叙事詩」「王たち——シュメールの讃歌」「賢者たち——シュメールの知恵文学」という各章のタイトルが示す如く、著者のシュメール学における学問的成果（数多くの堅実な仮説と見解）が提示されている。更に、第九章では『歴史はシュメール』に始まるという、後に世界的ベストセラーになり、一〇ヶ国語以上の言語に翻訳された著作の誕生の経緯が記され、以下第一五章の「終わりを彼方に見て」まで、九二歳の今日なお精力的な研究活動を続ける著者の足跡が忠実に、詳細に辿られている。

なお、本書は我が国におけるサミュエル・ノア・クレーマーの三冊目の翻訳書である。<sup>(註)</sup> 訳者久我行子氏はペンシルヴェニア大学における彼の最後の直弟子の一人であり、恩師に対する深い愛情と配慮のいき届いた邦訳は好感が持てる。とりわけ、原著にはなかつた訳註（三六一一三九一頁）には訳者の一方ならぬ努力のあとが窺われ、本書をシュメール学の格好の入門書た

らしめている点は特筆すべきであろう。

(註) 佐藤輝夫・植田重雄訳『歴史はスマーリに始まる』（一

九五九年、新潮社） 小川英雄・森雅子訳『聖婚』（一九八九年、新地書房）。